

「脱出記」の記憶 —シベリアの強制—

尾形 芳秀

2000年の頃だろうか、定年となって漸くかつて住んだ樺太のことを思い出すようになっていた。所用でロンドンのセント・ジェームズ・パーク・ホテルに滞在していたとき、ふと立ち寄った書店で「The Long Walk」という本が偶然目についた。ポーランド人のスラヴォミール・ラウイツ(Sławomir Rawicz)という人が自分の体験記を書いたものだ。その本を手にしたとき一枚の地図にくぎ付けとなった。それにはシベリアからインド(ダージリンあたり)までの逃走ルートが書かれていた。シベリアから生きて脱出できるものだろうか、と半信半疑だった。内容もよく理解できずに滞在記念にと購入してきた。その後、目次や英国の書評程度は読んでいたが、樺太で実際にあったことが走馬灯のように思い浮かべられた。

1940年前後だと思うが、樺太の首都豊原で、ヨーロッパから来たという名も知らぬ女性が数人滞在していた。喫茶店で働きながら誰かを待っていたようである。しかし、この女性たちのことは当時の人々は誰も詳しいことは知らない。ソ連と国境を接する島である。きっと北サハリンから脱走か亡命してくる人を待っているのではないか、と人々は噂をしていた。数年が経過して彼女たちのことは私たちの視線から消え話題にもならなくなった。

私は2000年頃、戦前・戦後を知る豊原の人々の集まりで、このことを話題にしたことがある。しかし、誰も詳しいことは知らない様子だった。ところが、その中の一人と思われる女性について消息の手が

りがみつかった。その女性たちはシベリアに抑留されていた最愛の人が脱走したとの噂を聞きつけ、もしかしたら地理的に樺太へ脱走したのではないかと考えて確証もないのにじっと待っていたというのである。

彼女たちの一人は、その後どのような経緯からか不明であるが、樺太通信局の英語教師をやっていたという。そして、通信局職員と結婚したという。きっと待っていたのは恋人だったのかもしれない。しかし、待ち人は樺太に現れることはなかった。他のヨーロッパの女性たちも同じような理由から極東の地で最愛の人を待っていたのであろう。

私はこの樺太の出来事と符合するところがあり、関心をもってこの本のことを思い出したのである。その後日本でも翻訳が出版された。それは「脱出記-シベリアからインドまで歩いた男たち」と改題されていた。シベリア脱走は、樺太ではなく何とインドへの前人未踏の脱出劇だったのである。私は樺太で待ちわびていた女性たちの思いと重ね合わせて、脱出劇は真実の物語だったことを知った。

現在では映画も制作されている。何故かタイトルも「The Way Back」となっていた。アメリカから取り寄せて何度も見たが、2012年末には日本でも発売された。ぜひ、翻訳された本をご覧いただきたいと思う。吹雪のシベリアを脱出し成功した数少ないドキュメンタリーである。



(おがた・よしひで)

「幽玄の情景」 — 賀茂 —

選と文=ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)

生の欲求は矢の如し。私の心の中で加速し、天の雷鳴の如く轟いて、消えていく。稲妻が落ちた場所に水が湧き、広い川となって流れ出す。これが賀茂川。時に澄み、時に濁る。ああ、私の心も同じ。時に澄みわたり、時に混乱する。ひとつの場所、ひとつの森にふたつの神の姿が見えるのはなぜ？あり得ないほど驚異的なこと。稲妻は何故に泉に射られたのか。神の意図は知る由もない。

瀬見の小河の清ければ。
瀬見の小河の清ければ。
月も流を尋ねてぞ。
澄むも濁るも同じ江の。
浅からぬ心もて。何疑いのあるべき。



上記は前駐日ポーランド共和国大使ロドヴィッチ女史による連載(2013年1月~12月号掲載予定)
「家庭画報」編集部への許可を得て転載